

司式:三田村雅子
奏楽:堀口 恵美

前奏:「神もしこれらの日々われらと共にいささずば」(J.N ハンプ)

招詞:わたしは知っている。わたしを贖う方は生きておられ、ついには塵の上に立たれるであろう。(ヨブ19:25)

讃美歌 204:「よろこびの日よ」

交読詩編 27. 1-6

- 01 【ダビデの詩。】主はわたしの光、わたしの救い/わたしは誰を恐れよう。主はわたしの命の岩/わたしは誰の前におののくことがあろう。
- 02 さいなむ者が迫り/わたしの肉を食い尽くそうとするが/わたしを苦しめるその敵こそ、かえって/よろめき倒れるであろう。
- 03 彼らがわたしに対して陣を敷いても/わたしの心は恐れない。わたしに向かって戦いを挑んで来ても/わたしには確信がある。
- 04 ひとつのことを主に願ひ、それだけを求めよう。命のある限り、主の家に宿り/主を仰ぎ望んで喜びを得/その宮で朝を迎えることを。
- 05 災いの日には必ず、主はわたしを仮庵にひそませ/幕屋の奥深くに隠してくださる。岩の上に立たせ
- 06 群がる敵の上に頭を高く上げさせてくださる。わたしは主の幕屋でいけにえをささげ、歓声をあげ/主に向かって賛美の歌をうたう。

朗読聖書①イザヤ書 50. 4-9

◆主の僕の忍耐

- 04 主なる神は、弟子としての舌をわたしに与え/疲れた人を励ますように/言葉を呼び覚ましてくださる。朝ごとにわたしの耳を呼び覚まし/弟子として聞き従うようにして下さる。
- 05 主なる神はわたしの耳を開かれた。わたしは逆らわず、退かなかった。
- 06 打とうとする者には背中をまかせ/ひげを抜こうとする者には頬をまかせた。顔を隠さずに、嘲りと唾を受けた。
- 07 主なる神が助けてくださるから/わたしはそれを嘲りとは思わない。わたしは顔を硬い石のようにする。わたしは知っている/わたしが辱められることはない、と。
- 08 わたしの正しさを認める方は近くなります。誰がわたしと共に争ってくれるのか/われわれは共に立とう。誰がわたしを訴えるのか/わたしに向かって来るがよい。
- 09 見よ、主なる神が助けてくださる。誰がわたしを罪に定めよう。見よ、彼らはすべて衣のように朽ち/しみに食い尽くされるであろう。

朗読聖書②マタイによる福音書 10. 16-25

◆迫害を予告する

- 16 「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。
- 17 人々を警戒しなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で鞭打たれるからである。
- 18 また、わたしのために総督や王の前に引き出されて、彼らと異邦人に証しをすることになる。
- 19 引き渡されたときは、何をどう言おうかと心配してはならない。そのときには、言うべきことは教えられる。
- 20 実は、話すのはあなたがたではなく、あなたがたの中で語ってくださる、父の霊である。
- 21 兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう。

- 22 また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。
- 23 一つの町で迫害されたときは、他の町へ逃げて行きなさい。はっきり言っておく。あなたがたがイスラエルの町を回り終わらないうちに、人の子は来る。
- 24 弟子は師にまさるものではなく、僕は主人にまさるものではない。
- 25 弟子は師のように、僕は主人のようになれば、それで十分である。家の主人がベルゼブルと言われるのなら、その家族の者はもっとひどく言われることだろう。」

祈祷

主イエス・キリストの父なる神さま。聖名を崇め賛美いたします。

いち早い夏がやって参りました。去年、一昨年の災害級の暑さを考えますと、これから長い暑さを乗り越える長期戦になるのだと予想されます。どうぞ皆さま、その中でお体を大切にお過ごしください。

そうした暑さの中に、今日、この礼拝にたくさんの方々を集めてくださったことを感謝いたします。私どもは日々の忙しさの中に追われて正しい道を踏み外し鈍感に生きてまいりました。どうぞ今日の礼拝のそのお力で、どうぞこの愚かで怠け物の私どもを正しい道に引き戻し、お導きくださいませ。

今、世界では止むことのない戦いが報告され、私どもの日本でも平和憲法を変えようとする動きも活発化しております。戦争がすぐ近くに感じられるような軍備の話であるとか、兵器の輸出などが話題になっております。まさに今の政府はそういう状況に対して前のめりになっている状況だと思えます。今少し慎重に、長い目をもって平和への粘り強い目立たない働きを続けていくことが私どもに出来ますように、続けていくことを選ばせてくださいますようお願いいたします。

教会ではお歳を召した方々の出席が難しくなり、そして介護や看護のために教会に向かうことができない方々も多くおられます。病と老いの寂しさの中におられる方々も増えてまいりました。どうぞ、それらの方々の苦しみと悩みと戸惑いと不安に、あなたの救いの御手が差し伸べられますようお願いいたします。ここに参会することができなかった方々にもどうぞ、上からの御顧みをお与えくださいますようお願い申し上げます。

今日はアジアサンデーでございます。アジアの国々の教会と共にこの日を迎えられたことを感謝します。これからも連帯と共感と共に、キリストの道を共に歩んでいけますようにお守りください。その全ての所で説教があなたの力に支えられて語られ、またその御力に支えられて聞かれますようにお祈りいたします。

主イエス・キリストの聖名を通してこの短いお祈りを申し上げます。アーメン。

讃美歌 408:「この世のもので」

説教「迫害の中で」

佃 雅之

朗読されました福音書の箇所は主イエスキリストが二人の使徒に向けて語られた説教の一部です。主は弟子たちを世へ遣わすにあたって、どのように歩むべきかを教えておられます。前回学びました 10 章 5 節以下では、「旅には金貨も銀貨も銅貨も持たず、下着や履物、杖までも持って行ってはならない」と命じられました。しかし同時に、「福音のために働く者が食べ物を受けるのは当然である」とも語られています。福音を伝える者には、主が必要な糧を備えてくださると約束されていました。ところが今日の箇所でキリストが語られているのは厳しい迫害の現実です。主は、「あなたがたは引き渡され鞭打たれる(17節)」とはっきり語られています。弟子たちが向かう先には、福音を喜んで受け入れる人々もいますが、その一方で福音を拒み敵意を向ける人々もいるので

す。なぜなら福音は人間に悔改めを求めるものであるからです。キリストの福音は人の生き方や価値観を問い直し、神の前に立ち帰ることを求めます。そのため福音を語る者は、時に拒まれ苦しみを受けることがあるのです。また 21 節では“家族との断然を覚悟しなければならない”とされています。

当時のユダヤ社会では家族は生活を共にするだけでなく、同じ信仰を守る共同体でもありました。そのためイエスを救い主として受け入れることは、それまで家族で大切にしてきた生き方とは異なる歩みを始めることでもありました。この問題は現代の私たちにとっても決して無関係ではありません。家族で同じ信仰を持って歩みたいと願っても現実には難しさがあります。自分だけが信仰を持った時、礼拝に行くことや祈ることが理解されず痛みを感じる場合があります。“どうして家のことより教会を優先するのか”と問われ、心が揺れる経験をされた方も少なくないのではないのでしょうか。また先祖を大切にす文化の中で葬儀や供養のあり方を巡って葛藤を覚える方もおられます。その時、私たちは問われます。“何を第一にして生きるのか”、“どこまで主に従うのか”。また同時に、この問は教会へも向けられています。聖書は教会を“キリストによって結ばれた家族”として語っています。私たち教会は、葛藤や痛みを抱えて集う一人ひとりを本当に家族として受け止めているでしょうか？主に従う道は一人で向き合う孤独な戦いではなく、教会という家族が共に祈り、支え合いながら歩む道です。キリストの弟子として生きることには苦難や葛藤を避けて通れない現実があります。それでも主は、“わたしはあなたがたを遣わす”と言われます。この言葉は今を生きる私たちにも向けられた言葉です。私たちもまた使徒たちに連なる者として、福音を告げ知らせる者として、この世に遣わされています。

今の私たちは使徒たちのような厳しい迫害を受けることはほとんどありません。けれども、迫害とは目に見える暴力や圧力だけではないのです。むしろ今日の私たちはもっと静かで、もっと気づきにくい形の試練の中に置かれているのかもしれない。信仰が少しずつ弱められ、主に従って生きることの真剣さが薄れていく。福音を語るよりも人間の安心や都合を優先してしまう。そのような私たち自身の弱さやまた現代における一つの迫害の姿なのかもしれません。私たちは主を礼拝する群れというより、御言葉を聞いて慰めを受けるだけで終わり、福音を携えて世へ遣わされる群れであることを忘れてはいないのでしょうか。あるいは礼拝以外の活動に心を奪われはいないのでしょうか。

教会の外に目を向ければ、私たちが遣わされていく場所も平安で心安らく場所ばかりではありません。死の悲しみに支配されそうな場があります。希望を失い深い失意の中へ沈み込んでいくような現実があります。怒りや憎しみに心が支配されそうになることもあります。主はそのような世の只中へ私たちを遣わされているのです。主が語られる通り、「それは、狼の群れに羊を送り込むようなもの(16 節)」です。

キリストは弟子たちに、そして私たちに羊として生きることを求めています。羊として生きるということは、憎しみに対して憎しみに応じないことです。悪口が悪口で返さない、暴力に暴力で立ち向かわない、それは弱さではなく十字架の主に従う生き方です。

キリストは弟子たちが敵意の中でも福音を語り続けるために必要な知恵を授けられます。「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。(16 節)」一見すると正反対のことが言われているように思います。聖書で「蛇」は知恵に富む生き物の代表です。知恵そのものは神が与えられる尊い賜物です。しかし知恵だけに頼って生きようすると、人は自分を守るために真実を曲げてしまうこと

があります。必要があれば嘘をつき、人を惑わせ、都合が悪くなれば責任を避けようとしてしまう。その時、知恵は神に仕えるものではなく人を傷つけるものへと変わってしまうのです。一方、「鳩」は聖書において純心さや柔和さの象徴として用いられています。けれども聖書には、「知恵のない愚かな鳩(参考:「エフライムは愚かな鳩のようで、良識がない。」(ホセ 7:11))」という言葉もあります。つまり純真さだけでは時に無防備になり、軽卒さへと傾いてしまうことがあるのです。人を疑うことを知らず、分別なく信じ込み、現実の危険を正しく判断することができない。だからキリストは「人々を警戒しなさい(17 節)」とも語られています。これは直訳すると「人間を警戒しなさい」という言葉です。人間の罪深さを知らずに歩むことは、本当の意味での純真さではないのです。弟子には蛇のような賢さと鳩のような素直さの両方が求められています。主が弟子たちに伝えたことは、世の悪意を知りながら、それでも悪に染まらないことです。人間の罪深さを知りながら、それでも神の前に真実であり続けることです。それが、キリストご自身が歩まれた道でした。そして主は、その道を私たちにも歩むように求めておられます。

しかし弟子たちが遣わされる場には厳しい現実があります。地上の権力者たちが弟子たちを裁こうとして集まってきます。けれども主は「心配してはならない(19 節)」と語られています。なぜなら、“話すのはあなたではない。あなたの方のうちで語ってくださる父の霊である(20 節)”からです。キリストに与えられた父なる神の霊が、その時、その場で、必要な言葉を私たちにも与えてくださいます。だから私たちは“何を言えがいいのか”と思い悩まなくてもよいのです。主は言われます。“話すのはあなたではない。あなたの中におられる霊が語るのだ(20 節)”と。だから私たちがすべきことは一つです。私たちの内で語ってくださるお方に耳を傾けることです。

イザヤ書には『主の僕』についてこう語られていました。「主なる神は、弟子としての舌をわたしに与え、疲れたものを励ますように、言葉と呼び覚ましてくださる。さらに朝ごとにわたしの耳を呼び覚まし、弟子として聞き従うようにしてくださる。(50:4)」主に用いられる者は“まず聞くものとされる”のです。私たちは御言葉に聞き続けなければなりません。備えが必要です。聖霊は私たちを用いて働かれます。語る力、支える力、祈る力、仕える力、一人ひとりに与えられた賜物には違いがあります。しかし主は、その一つ一つを御業のために用いてくださいます。だから私たちは、自分自身を主にお献げするのです。礼拝においても、日々の歩みにおいても、“主よ、この私を用いてください”と差し出していくのです。主はその献げられたものを活かして用いてくださいます。私の内で主が語ってくださる、私を用いて主が御心を表してくださる、そのことが弟子として生きるものに与えられた大きな慰めであり確信なのです。

しかし迫害に会う町の中に留まり続けることは容易なことではないことをキリストはご存知です。主は「一つの町で迫害されたときは、他の町へ逃げて行きなさい(23 節)」とも語られています。弟子たちは無理をして耐え続けることだけを求められているわけではありません。時には逃れることも主に従う歩みの一つなのです。落胆や絶望の末の敗北ではなく、福音宣教の使命を絶さないための道です。弟子は自分の勇敢さを証明するためではなく、最後まで主から託された勤めに仕えるために生きるのです。心も体も疲れ果て信仰まで失ってしまうような歩みを神は望まれているのです。人々があなた方を迎え入れず、あなた方の告げる言葉に耳を傾けようとしないうちに、そこに留まり続ける必要はありません。拒絶された場所に固執して力を尽くすよりも、福音を待っている人々の下へと向かうのです。

今日は、この礼拝の後、団 thể例会があります。今年度の学びの共通文書とされています『使徒言行録』を読むと、迫害によって弟子たちが「散らされる」度に福音は新しい土地へ運ばれていくことがわかります。人間の敵意や拒絶さえも主は福音宣教のために用いられます。使徒パウロの生涯を見ても同じです。彼は一つの町に留まり続けた人ではありませんでした。人の目には逃げているように見えても、その歩みを通して、福音を次の場所へ運ぶ、それが神の導きであるからです。退くことは不信仰ではないのです。自分の力で何とかしようとするのではなく、主が働いてくださることに信頼する信仰の姿勢です。

ある牧師がこう語ったことがあります。“私はこの教会から離れようと思ったことはあるが、牧師をやめようと思ったことはない。”この短い言葉には牧師としての深い葛藤と、それでも失われない使命への思いが込められています。人間関係に悩み、誤解に苦しみ、時に心が折れそうになる、それでも主に召された使命は手放さない。これは牧師だけの特別な思いではないでしょう。教会に集う私たちも人間関係に悩み、傷つき、“もう教会から離れたい”と思うほど疲れてしまうこともあります。しかしそれでも信仰を捨てようとは思わない。キリストに従う歩みをやめようとは思わない。何故なら私たちが教会に集う理由は、人間関係の心地よさではなく、主に召され、主に出会ったからです。

教会は時に傷を負いながらも、なお主に従って歩む者たちの群れなのです。苦しみの中で、人にとって最も辛いことの一つは、“いつ終わるかわからない”ということではないでしょうか。“出口が見えない”、“先が見えない”、“終わりのない苦難”は人の心を疲れさせます。この忍耐には意味がないのではないかと思います。しかしキリストは約束してくださいました。“人の子は来る”と私たちの向かう先には必ず主が立っておられます。

今日の箇所の最後にキリストは、「家の主人がベルゼベルと言われるなら、その家族のものはもっとひどく言われることだろう(25節)」とされています。「ベルゼベル」とは“悪霊の頭、サタン”を指す言葉です。主ご自身が人々から“サタン”と呼ばれたのです。しかしここで大切なのは、主が私たちを“その家族のもの”と呼んでくださっていることです。主が人々から“ベルゼベル・悪霊の頭”と言われるなら、弟子たちも同様な非難や拒絶を経験することがあります。けれどもそれは、“主の家族として、主と一つに結ばれている”ということでもあるのです。

私たちは主に従う歩みの中で苦しみを経験することがあります。拒まれることもあります。孤独を感じることもあるでしょう。けれどもキリストが“あなたはわたしの家族だ”と呼んでくださっています。

主と共に歩む教会には確かな希望があります。この恵みの中で互いに支え合いつつ福音を携えて歩み続けたいと思います。お祈りをいたします。

聖なる神、今朝も私たちを教会へと招き、あなたの御言葉を聞かせてくださったことを感謝いたします。あなたは私たちを、この世の平穏な場所だけではなく、悲しみや不安、怒りや敵意の只中へと遣わされます。時に福音が拒まれ、誤解され、私たち自身が傷つくこともあります。しかし主よ、そのような中にあっても、あなたは決して私たちを見捨てず、聖霊によって語るべき言葉を与え、そして“あなたがわたしの家族である”と呼んでくださいます。この恵みを心から感謝いたします。どうか主よ、私たちがあなたを信頼して歩む者とならせてください。この教会が主にある家族として、すべての人を受け入れ、支え合う群れとなりますように。迫害の中にあってもキリストとの再会の日を待ち望みながら、あなたと共に歩ませてください。

主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:528「あなたの道を」

献金・感謝(野呂百合子)・主の祈り

天の父なる神さま。主にある兄弟姉妹と共に礼拝を献げることが赦されましたことを感謝いたします。

説教を通して豊かに言葉を与えてくださり感謝いたします。私たちがこの一週間をそれぞれの旅路の中で御言葉を糧として歩むことができますようにお導きください。

私たちは必要なものを与えられ、主の僕として生きることが赦されていることを感謝いたします。今それぞれが与えられたものの中から感謝と献身の徴を御前に献げます。どうぞ祝して教会のご用のために用いてください。

主が教えてくださった『主の祈り』を共に祈り、新しい日々を迎えさせてください。「主の祈り」…アーメン。

讃美歌:90「主よ、来たり、祝したまえ」

派遣:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告:教会学校:次週ペンテコステ礼拝案内、9時、会堂。どなたでも出席できます。

後奏:「フーゲッタ」(J.E. レムト)